寒さも和らぎ、優しい春の光が差し込む季節となりました。本日は、私たち 99 名の門出に対してこのような式典を挙行して頂き、誠にありがとうございます。また、ご来賓の皆様、長鶴学長、諸先生方にご臨席を賜り、卒業生一同、心より感謝申し上げます。

振り返れば、この 4 年間は長いようで短く、私たちにとって思い出溢れる有意義な日々でした。

なかでも、実習は、私にとって大変貴重な体験となりました。特に、印象に残っているのは、4 年次の実習で出会った、ALS で、人工呼吸器で生命を維持している 50 代男性 A さんとの関わりです。話すことができない A さんの持てる力である視線や瞬きを活用して、その意思を汲み取ることはとても難しいことでした。関わりの中で、ご家族と会えない寂しさを抱いていることが分かり、時間制限のある面会時でも、A さんの希望に添った時間をご家族と過ごしてほしいと思いました。そこで、A さんがご家族に伝えたいことを今までの生活背景を捉えながら予測し、いくつか尋ねると、面会時に奥さんに手を握って欲しい、ということが分かり、その内容をご家族に伝えました。面会後、A さんに「奥さんから手を握っていただきましたか。」と尋ねると、何度も私の方向に視線を動かし、A さんの右の口角がわずかに上がり、笑顔とも読み取れる表情が見え、喜びがひしひしと伝わってきました。また、ご家族も A さんと充実した時間が過ごせたことに感謝されていたそうです。この体験から、看護師の行動一つ一つが、その人らしくいられる生活や環境に影響することの責任の重さを実感するとともに、その行動が患者様を笑顔にすることも可能だという看護のもつ力の素晴らしさに気付くことができました。この実習から、患者様の代弁者となり、ご家族との架け橋となる存在になること、また、患者様の持てる力やその時々の小さな動作を見逃さず、その人らしさを尊重できる看護を提供できる看護師になりたいと思いました。

また、3 年次の半年間の実習は、先のみえない不安に気持ちが挫けそうになることもありました。しかし、仲間とディスカッションを重ねたり、看護技術を夕暮れになるまで練習した日々があったからこそ、向上心をなくさず、どんなに困難な状況の中でも乗り越えることができました。そして、日々の友達の温かい言葉が、私の心を癒し、前向きな気持ちを保つ助けとなりました。最高の仲間がいてくれたからこそ、4 年間の大学生活はかけがえのない思い出となり、今日笑顔でこの日を迎えることができたと思います。本当にありがとう。

今、私たちは看護の道へ踏み出す覚悟を固め、それぞれ新しい道へと歩んでいきます。これから待ち受けるのは、決して平坦な道ではなく、時に困難に直面することもあるでしょう。しかし、大学で仲間と過ごした日々、積み重ねた知識や技術は、私達にとって大きな財産になると思います。この 4 年間の大学生活の経験を自信に変え、様々な困難に直面しても専門知識と技術を磨きながら、真摯に患者様に向き合い、最善な看護を提供できるよう精進してまいります。

結びにあたり、今日まで熱心にご指導くださった諸先生方、より良い学びの環境を整えてくださいました職員の皆様、臨床実習を通して多くの学びをくださった患者様や指導者の皆様、そして、一番の応援者であり陰ながらあたたかく見守り、支えてくれた家族、ともに支え合った最高の仲間たち、全ての方々に深く感謝申し上げますとともに、本学の今後の益々のご発展と在学生の皆様のご活躍を心よりお祈りいたしまして答辞とさせていただきます。

令和 7 年 3 月 17 日

第 25 回 卒業生代表　廣重 花音